

第17世紀のポーランドの彗星學者ルビエニツキ (S. Lubienitzky) が蟹座の西部、双子座との間に、蝦に似た形の“小蟹”星座を作つた。まことに小さい星座で、最も微光のものばかりであるから、馴れない人々には殆んど眼につかないのである。しかし、双子と蟹との間には、誰が見ても一寸そこに空虚の感じがあるので、何かの新星座によつて之を塞がうとした心持ちは理解出来ないでもない。

黃道十二星座の配列してゐる中へ割り込んで、こんな位置に新星座を作るといふことは、まことによけいな事であるやうに近代人は考へるかも知れないが、中世の天文家のこうした心持ちを理解するためには、(いづれ、別稿に詳記するつもりであるが、) 星座といふものの根本から考へ直す必要があるし、又、今の都會生活者と違つて、昔は、夜空を眺める場合の人工的な燈火の妨害が無かつたものだから、言はゞ、眼に星が澤山見え過ぎて、古人に見逃がされてゐる星形を、棄てゝ置けなかつたものと思はれる。この心持ちは、今でも都會を離れた田舎で星空を仰ぐ者には肯かれるところである。

Tigris ティグリス河

ケプラの弟子であつたヤコブ・バルチ(或は、ラテン化して、バルチウス)は、蛇遣ひ座の東部から東へ“ティグリス河”といふ新星座を作つたことがある。これは、蛇遣ひ座のベ星やガ星のあたりから始まり、鷲とヘルクレスとの間を通りぬけ、矢座の一部をかすめ、白鳥のベ星の近くから、狐座を東へ縦走し、小馬を経て、ペガソスの首のあたりまで及ぶものである。夏の空に、これを追跡することも意味が無いわけではないが、どうも之れは甚だまぎらはしい河筋と言はざるを得ない。どうせ、肉眼觀察にのみ訴へるのだから、只、特殊な敏感の持ち主のみが直感する星象かも知れないが、自分も之には少々閉口してゐる。それにしても、昔の人は、よく々々物ずきな星座を作つたものである。

エリダン河が一名“ユーフラテス河”と呼ばれるものだから、古代文化史上、これと並稱されるティグリス河を、やはり、星座として、こゝに認めたのであらう。(つづく)

天 の 川 (6句)

さばてんに夜々の銀河の位置がある	雄 一
風鈴や既に銀河の見ゆる窓	鑽 太 郎
うしを鳴る鳴門の空や天の川	澄 子
病院船銀河の海をふるさとへ	福 三
銀漢や蒙古へつゞく山の波	大 吉 林
満潮の河口廣し天の川	鬼 灯